論 文 内 容 の 要 約

論 文 名	Rectal Biopsy, Rather than Ileal, is Appropriate to Confirm the Diagnosis of Early Gastrointestinal Graft-versus-host Disease（早期の消化管移植片対宿主病(GVHD)の診断確定には、回腸生検より直腸生検が適している）
氏　　名	南野　弘明

【背景】
造血幹細胞移植後に発生した消化管移植片対宿主病(Graft-Versus-Host Disease: GVHD)は、重篤化しやすく生命予後を左右する重大な因子である。従って、早期に適切に診断することが生命予後改善に繋がる。一方、消化管 GVHD の好発部位は、回腸あるいは直腸と報告されているが一定の見解はなく、深部回腸と直腸を同時に評価した報告もない。
【目的】
消化管 GVHD が疑われる症例に対し、回腸および直腸粘膜を内視鏡的かつ病理学的に同時評価し、適切な評価部位を追及する。
【対象と方法】
血液悪性疾患の根治的治療として造血幹細胞移植した症例で、移植後 100 日以内で水様性下痢などの症状から消化管 GVHD が疑われる患者を対象とした。経肛門的シングルバルーン小腸内視鏡（オリンパス・メディカル社）検査を施行し、回腸口側（回盲弁より約 40-50 cm）・回腸末端・直腸における粘膜傷害の内視鏡的評価と、同部位からの生検組織による GVHD 診断を行い、両者の陽性率および関連性を検討した。病理組織的に、リンパ球浸潤を伴う上皮細胞のアポトーシスの存在をもって GVHD の確定診断とした。
【結果】
連続する 16 例（男 11 例 / 女 5 例、平均年齢 45.6 歳、付随症状；嘔気 37.5%・皮疹 68.8%）が登録され、11 例（68.8%）が病理組織学的に GVHD と診断された。11 例全てに直腸での GVHD 診断が得られたが、回腸・直腸ともに認めたのは 8 例（72.7%）であり、回腸のみに認めた症例はなかった。粘膜傷害に基づいた内視鏡的消化管 GVHD の正診率は、回腸 43.8%・回腸末端 43.8%・直腸 37.5%と低く、粘膜傷害の程度との関連性は認められなかった。
【結論】
直腸におけるランダム生検が、早期消化管 GVHD の確定診断において重要かつ有用であることが示唆された。